

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと「風」

第二十九号（二〇〇八年十月）

風に吹かれて（ ） 白井啓治

『風の吹いて 秋の戸を叩く』

何時もより風の鳴らす音が硬いな、と思ったら夜半にはすっかり秋風になっていた。猫の耳ちゃん、我が胡坐をかいた膝の中から出ようとしな。昨日に比べていく分風が冷たく感じられる程度なのに、耳ちゃんにはもうすっかり秋支度のようである。この夏、ズーツと楽しんできたオクラの薄絹のような黄色の花ともそろそろお別れである。

先月号に文化力と題して石岡の祭りのことなどについて少し書いたら、早速、こんな資料がありますよ、とお送りいただいた。とてもありがたいことである。その方は、小生が、おそらくは読んでいたろうけど、といった言葉を添えて資料を送っていただいたのであったが、お言葉のとおりこれらの資料は読んだことのあるものがほとんどであった。

石岡の地名の由来に関する資料に、鈴木健氏の書かれたものがあった。鈴木氏とは、風の会の集まりに以前お招きし、お話を伺った事があったが、その後ご無沙汰してしまっている。文中に失礼ではあるが、ご無沙汰の非礼をお詫びいたしたい。私にとって、氏は石岡にきて最初に出会った物語を内包した歴史や地名の考察文の著者である。

私は、本会員の打田さんのように歴史好きではないのであるが、嘘八百の作りごとを書く場合にも必ずそれらの時代考証として頭に入れておかなければならないので、一通り目を通す。

石岡に越してきて、歴史の里と自称する街なのだから、少しぐらいいは何かを読んでもこうと、石岡市で出している「常府石岡の歴史」という本を求めて読んでみたのであったが、申しわけないが実につまらない、物語の内包されていない自分勝手の年号暗記のような本であった。その後、石岡市史などにも目を通したが同様であった。歴史の里と自慢するに足らず、多くの市民の人達が石岡のことを知らないというのは、この本の編纂によく象徴されている。

そんなときに出会ったのが鈴木氏の著書であった。しかし、石岡では彼のことをあまり歓迎していないようである。ある会合で鈴木氏の本のことを言ったらそっぽを向かれてしまったのである。石岡に関する資料として今回お送りいただいた「コピー」の中に、鈴木氏の地名石岡に関する考察があり、大変懐かしく嬉しい気持ちにさせられた。自分が、この本には物語があるな、と思っていた本を違う人から同じように紹介されるのは実に愉快な気持ちにさせられる。

さて、お祭りも終わり、秋風が本格的に吹き始める季節になってきたのであるが、自慢するお祭

りに対して、自慢する人達のどれ位が今年をしっかりと総括しているのだろうか。

この私も傍観者として、また希望のある形でお祭りの継承されていくことを願う者として、今年を総括しておかねばならないと、お祭りの中日の昼間に出かけてみたのであったが、ある人にこんなことを言われた。

「夜見に行かないと賑やかさが分からないでしょう」

と。しかし、お祭りが市民の生活の中に希望の姿としてしっかりと根をおろしているのであれば、それを感じさせる雰囲気は、酒の勢いを借りた群集心理の働かない昼間に出かけた方が正直に見て取れる。

中日の昼間歩いてみたが、残念ながら去年よりも一段とお祭りの雰囲気寂れていた。夜になり何万人かの人を集めたからと言って、お祭りが明日の希望に満ちて継承されていることにはならない。それにしても石岡の祭りの寂れようは無残としか言いようがなかった。

それで改めて「常府石岡の歴史」の第三節、常陸総社祭礼の成立、を捲り、祭りの歴史をたどってみた。ところがそこに「総鎮守」なる見慣れない言葉を発見した。

本来総社の成り立ちから考えれば、総社が鎮守（地域の神）に成り得るものではない。しかし、時代の流れの中にあつて、その形や内容は変化していくものであるし、また、総社といえど生き残りをかけての所謂、企業買収と同じようなことがなされたり、対等合併ということが行われてきたに違いない。そのことは一つの歴史であるので、総社がその地域の鎮守になったとしてもかまわな

いことである。

しかし、歴史に詳しくはないので「総鎮守」というものがあるのかどうかは分からないが、初めて目にした言葉であった。それで、疑問に思い、辞書を引いてみたのだが、安物の辞書の所為なのか、総鎮守という言葉は探せなかった。

総社がそのように自称しているといつののであれば、それはそれでかまわないのであるが、早速図書館にでも行って調べてみなければならぬ。総鎮守という言葉はわかるが、もしかしたら「総鎮守的な」という意味で用いられたのかもしれないが、その言葉の存在は知らなかった。勉強不足と言われるかもしれないが、総鎮守とは初めて目にした言葉であった。

改めてこの「石岡の歴史」という本を読んで感じたことは、実に物語のない(希望の見えない)本であるということであった。こんなことを言うては失礼かもしれないが、自分たちの都合の良いことを正当化するために書かれた感じの強く臭う本である、と言っても良いだろう。こんな風に感じてしまうのは、私一人なのだろうか。だとすれば、小生よほどへそ曲がりなのだろう。

だが、市の教育委員会編纂の本であることを考えれば、自分たちの都合の良い価値基準、価値判断に立った正当性を書くのは、賛成はしないがさもあると納得できる。そこが、市販の出版物とは違う所である。だから面白くないともいえる。

余談であるが、ずいぶん昔のこと。文部省関連の原稿を書いていて、そんなつまらないことは書けないと言ったら、勉強はつまらなくてもいいと言われたことがあった。次から、その仕事は断った。

歴史ガイドに同行して(6) 兼平ちえこ

テツク テツク

やさしく 優しく 家内安全

笑つて 笑つて 無病息災

勇み 盛んに 五穀豊穡

大口開いて 悪霊退散 ちえこ

九月十三、十四、十五日、石岡の熱い三日間の余韻が初冬のつゆ(寒露)となって消えて行きます。今年のお祭りは十四、十五日とアンケート調査のお手伝いをしながらの見学になりました。町並みの寺社も心開いてお祝いムード一色。今年のアンケート調査の中で以前二回ほどお手伝いした時にはなかったご意見が三件ほどありました。

「是非、石岡のお祭りは継続してほしい」「このご時勢に年番町は大変でしょうが一町も欠けることのないよう頑張ってください」「元年番町に住んでいた方より」「人と人のつながりが薄い今の世の中多くの人達とお祭りを共有する雰囲気や心のよりどころになるはずです」とのことでした。

『人がいるから大好き』

私にとつて心暖まるご意見に、石岡市民として、ちよっぴり誇りを感じさせていただきました。

今回も「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへご案内した、寺社を中心としたコース 北向観音堂 平福寺 日天宮をご紹介して行きましょう。

#### 北向観音堂

所在地は国府五丁目。常光院より、金丸寿通りに戻り、点滅信号に向かって、六号国道にぬける国府公民館通りに出ます。

「富田北向十一面観音」の標記が目に着きます。入り口に向かって左側には平福寺入口、右側は江戸末期創業の造り酒屋。「本尊は、安産、子育て、厄除けの効き目があるという十一面観世音菩薩。町内には市指定有形文化財、鰐口(わにくち：社寺の堂の軒下につけ、前に垂らした綱を引いて祈願のために打ち鳴らす、日本独特の青銅製、鉄製の鳴器)や、県指定有形文化財「富田のささら」の獅子、三頭が保存されている。

「富田のささら」は、石岡のおまつりで神輿の露払いの先頭に立つもので、黒漆を塗り、目、歯に金箔を施した老獅子、若獅子、女獅子の三匹の獅子の舞う姿は愛くるしく魅力があるものです。

「鰐口」については、日本に現存する最古のものは長保三年(一〇〇一)のもので、この鰐口は天仁年間(一一〇八―一一一〇)と記されていたといわれ、県内では最古のものとされている。

昔「神宮寺」という寺が総社宮の付近に建てられ、元禄年間に富田町に移り、その後、今の場所に建てられ、現在はその観音堂のみが残っており、鰐口はその神宮寺(点滅信号の道路を越え、観音堂まで行く中ほど、道路際、右側に神宮寺橋と彫られた石橋が見過すほどの大きさで、遺跡が現存しており、往時をしのぶことが出来ます)にあったものとされている。現在は、毎月十七日にご開帳。午前九時から十六時迄。そして、毎年七月第四週の日曜日には、護摩たき縁日として行われている。

#### 平福寺

春林山平福寺と称し、宗派は曹洞宗。ご本尊は如意輪観音菩薩。当寺は常陸大掾氏の菩提寺として知られる。境内には常陸大掾氏墓所があり、十

五基の五輪塔は平安時代から戦国時代まで常陸国に勢力を誇った大塚氏代々の墓塔といわれている。本堂正面には明治二十七年、重野安繹教授撰文の「常陸大塚氏碑」がある。高さ三、二メートル、一〇七二文字の長文である。また昭和五四年十月に円空作と鑑定された大黒天像（市指定有形文化財）はナタ彫りと呼ばれている。彫り方と微笑みの表情が特徴で、県内で円空作が発見されたのは非常に珍しく、東北遊行の途中に石岡に立ち寄って作ったものと思われる。

#### 日天宮

平福寺より北向観音堂にもどり、主屋、長屋門、文庫蔵、仕込蔵、釜場、春屋（つきや）の七棟の登録文化財を保持する府中誉酒造の前を通り、間もなく三五五線、笠間通りに出て、左に折れ、サツシ屋さん側を右に折れ、左側は駐車場、過ぎると左折、約百メートル右側奥まったところに鎮座しています。

鎮座地、国府七丁目。祭神天照大神。小さな石橋を渡ると御影石で造られた神明鳥居形式の大鳥居があり、間もなく小鳥居がある。正面には間口二間の日天宮社殿、裏に奥の院がある。左には稲荷大明神、右に御嶽大神宮、源義家の絵馬を掲ぐ、そして正教霊神（権現様）がある。境内には、府中六木の一つに数えられた樹齢七八〇〇年と言われた「日天宮の大樺」は今はなく、二代目の樺が真っ直ぐに空をさし、境内を見守っているかのようです。国府がおかれた時代「日、月、星」を祭った「府中三光の宮」が造られ、その一つである。

来月は中町通りを中心としてご案内いたします。

参考資料・石岡市史(上)「石岡の歴史と文化」

#### 縄文人のころ

菅原茂美

ふるさとの民話・伝説・神話など、いつ頃、どこで誰が、どのようにして、作り上げたものなのか？ 昔話など聞く度に、ただ感心するだけで、特に深く考えたこともなかった。

昔話には、実に示唆に富む教訓が、それとなく行間に漂っている。『昔の人は偉いよな！』と、ただ漠然と受け止めていた。特に理系の私は、ふるさとの物語に耳を傾ける余裕もなく、ただ専門の業務に追いまくられどつし。古希過ぎて、今思えば、かなり片半端な日々を送ったものよと、反省しきり。

しかし、どんな素晴らしい物語も、いつか・誰かが・どこかで、世間にある色々な話をうまくアレンジしたり、脚色したり、創作を加えたりして、面白おかしく纏めたに違いない。誰にも好かれ、それでいて、仰々しく表立たないが、それとなく教訓に満ちた物語として、纏め上げたに違いない。或いは何世代もかけ、加筆・修正され、時代にマッチしたように改め、広く根付いていったものと思つ。

昔話は、天才的な一人の語り部や、作家の手になるものではなく、底辺の広い、多くの人々により、永年かけて醸成されたものである。そうでなければ、何百年も何千年もこのように、物語が民衆に語り継がれるわけが無い。

その辺の事情を知りたくて、色々の書を漁ってみたが、どうやら、民話の起源は、縄文縦穴住居の『炉端』のあたりに、あるらしい。

縄文住居において「炉」の主目的は、私の想像に反し、食べ物を煮炊きしたり、暖をとったり、

明かりとりというものは、ないらしい。灰の中に、燃え尽きにくい栗の木などを埋め、火種を保ち、神聖な場所としての意味が強いという。考古学者の実験によると、土器の鍋で、ものを煮たり、暖をとるためには、かなりの火力を要し、屋根に火の粉が飛び、火災の危険性が大きかったという。

【考古学者の小林達雄氏は、博物館や史料館などで、復元された縄文住居の中で、家族がこざっぱりした顔で炉を囲む姿は、虚像だと言っている。実際は家の中は煙が立ちこめ、（火種を守るため、燃え尽きにくい木をいぶし続ける）涙が溢れ、咳が止まらないのが現実で、朝起きれば目脂（めやに）が一杯であつたらう。秋田県鹿角地方には、目くそほろぎ」と言つ言葉があり、竈（かまど）や、いろりの煙で結膜炎になり、朝起きたら先ず「目脂を指で擦り取る」と言つ意味だという。又、昔は火種を絶やしたら、嫁は離縁されると言つ地方もあつたとか。故に縄文人が、こざっぱりとした顔していられるわけが無いと言っている。】

即ち、ものの煮炊きは、原則として、屋外で行われ、炉の回りは、家族団らんの場合であり、今日の出来事、仲間達や周辺の動植物の情報など、互いの語らいの場であつたらしい。

そういう話も、毎日同じ事の繰り返しでは、飽きてくる。そこに、ある種の誇張や、作り話が織り込まれ、尤もらしく、しかも興味津々で、他人を引きつけるような話に発展させ、まことしやかに纏め上げる。

例えば、小高い丘や山の麓には、どこかに必ず、清水が湧き出る所があるだろう。石岡にも何か所かあるようだが、永年降り積もった雨が、地下水として蓄積され、どこかにその噴き出し口が現れ

る。水が涸れることなく、渾々とわき出せば、自  
ずと植物が繁茂し、動物が水を飲み集まる。ま  
た水中には、カエルやイモリなどが住み着き、そ  
れを狙うマムシなどが居着く。そこへ人が水を汲  
みに行けば、時によりマムシに食いつかれる。運  
が悪ければ命を落とす。

そこで物語としては、たかがマムシ(六〇cm足  
らず)で命を落としては、人に笑われるだけの話  
になるので、マムシは『大蛇』ということになる。  
そして、大蛇と言っただけではもの足りなくなり、  
『龍』となり、そしてついには、人智の及ばぬ『龍  
神』となる。龍神は時により、若者に化け、美し  
い娘にプロポーズし、約束を守らなければ、とん  
でもない災難に遭つ。約束を守ることの重要性を、  
物語の中で教える。

又、日照りが続けば、村人達は、雨乞いの儀式  
を行う。すると龍神は、天空を駆けめぐり、雲湧  
かせ、雨を降らせて、日照りの田畑を潤し、農民  
達を助ける。儀式を司った長老とか村の統治者は、  
自ずと村人から大きな信頼を勝ち取る。村は繁栄  
する。村人達は改めて、龍神に感謝し、ものを捧  
げ、舞を奉納する。祭りや民俗俚諺の起源は、大  
方こんな所である。

さて今の世は、このような家族が囲む「炉」が  
無くなり、長夜を語り明かす「ゆとり」も、なく  
なつた。集落でも、町内会でも一方的な、ピジネ  
スだけの会議に終わり、新年会や忘年会も参加者  
が減り、形ばかりの開催で終わる。

近年、詐欺や偽装が蔓延し、世の秩序が乱れ放  
題の遠因は、家族・集落などで、日頃の語らいの  
場が失われ、近所がまとまって、地域興しなど自  
己責任を果たさずとせず、なんでも行政など人頼

みにする。なにもかも個人主義が横行し、社会の  
仕組みが自由競争主義・経済成長至上主義などに  
突っ走り、己の利の追求だけが重要となる。地域  
の共同性など軽視され、自分さえよければ、それ  
で良しとする風習が根付いた。世は乱れ放題。こ  
んな状況では、現代版の新たな民話の創造も醸成  
も、あり得ないだろう。

個人成績重視主義だけでは、野球もサッカーも  
勝てぬ。みんなが力を合わせてこそ、大きな実り  
が得られるであろう。郷土愛や、愛国心も、小さ  
な集いから盛り上がる団結心・みんなで何かをや  
ろうとする強い心。それこそが、郷土が発展して  
いく原動力となるのである。井戸端会議的な、  
古き良き時代の再現を期待したい。

さてだいぶ話が逸れたが、我々日本人の祖先で  
ある縄文人とは、一体、いつどこから来たものな  
のか？ 祖先を辿れば切りがないが、ものの順序  
として、少しは触れておきたい。

今から六五〇〇万年前、中米ユカタン半島に直  
径一〇kmの小惑星が衝突し、全盛を誇っていた恐  
竜が滅亡した。すると、恐竜の陰で怯えて細々と  
暮らしていたネズミ大の哺乳類の元祖が、ここぞ  
とばかり、大繁栄し、食虫目(モグラの類)の中  
から、霊長類 類人猿 人類へと進化を遂げてい  
く。大型類人猿から、オランウータン・ゴリラが、  
そして四七〇万年前、ボノボ(ピグミーチンパン  
ジー)が、共通祖先から枝分かれし、直立二足歩  
行する『人類』が誕生した。

## ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

10月18日 宮下 祥子 ギターリサイタル

10月26日 長谷川きよし コンサート

12月 7日 マリア・エステル・グスマン

ギターリサイタル

12月14日 ロス・トレス・アミーゴス

フォルクローレコンサート

ギター文化館も開設して今年で15年になります。  
魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ち  
いたしております。

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

FAX0299 - 46 - 2628

アフリカで多くの化石人類が、盛衰を極めたが、最後エチオピアに残った原人（ホモ・エレクトウス）から、二〇万年前、DNAの一部を交換した「新種」が生き残った。これが現在、全世界に広がった我々「新人」（ホモ・サピエンス）である。現在地球上に生存する、全ての「ヒト」はこの一種のみで、その数、六五億人と、全哺乳類中、最大のポピュレーションを占めることとなった。

オーストラリアに、五万年ほど前から定着しているアボリジニは、今から二〇〇年前、西洋人により発見された時には、未だに石器時代の生活であり、新人とは違つ、原人の生き残りでは？と考えられたが、色々な解析の結果、我々と同じ新人であることが証明され、一九六七年に初めて市民権が与えられた。

一方、ヨーロッパでは、今から三万年前まで、我々新人と同じ時代に、同じ場所ですらした、ネアンデルタール人（旧人）がいた。彼らは先程述べたホモ・エレクトウスから、我々新人より一〇万年ぐらい前に枝分かれし、先にアフリカを出て、ヨーロッパに定着したものと考えられる。そして後発の我々新人と争つてもなく、混血するのではなく、三万年前、肅々とこの世を去っていった。あたかも、遺伝子の中に、種としての寿命が組みこまれていたかのよう。しかし、ネアンデルタール人は、我々新人より、脳容積はずっと大きく（一六〇〇cc）、体もはるかに頑丈であったという。更に死人を丁寧に埋葬し、花を捧げる心優しさ・文化も持っていた。突如滅亡した原因については、今、学会で盛んに議論されているところである。

更に一方、今から一万三千年前まで、インドネシアのフロレス島（バリ島の東）には、史上最

小（大人の身長一・五m・現世人類の三歳児並）の原人「ホモ・フローレンシエンシス」が生存していた。骨格構造から、明らかに成人であり、突出した眉丘、脳容積（チンパンジー並）など、新人ではなく、旧人でもなく、原人そのものである。しかし、石器はかなり進歩したものであり、石錐（いしきり）・石刃・尖頭器（槍先）など、高度に進化したもので、ピグミー・ステゴドン「アジア象（五ト）が小型化（〇・五ト）したものを」などを、食料にしていた。ならば、フローレンシエンシスは一体どこから来たのか？

答えは、ジャワ島などにいたジャワ原人が、島伝いに渡つてきて、食料の少ない、小さな島に猛獣がいけない場合、動物は小型化するという「島嶼（とうじよ）化現象」によって、象も、ヒトも小型化したと説明されている。

【ネアンデルタール人にしろ、フローレンシエンシスにしろ、これが原因というものが見つからないのに、忽然とこの世から消え去って行った。我々現世人類は、万物の霊長などと奢り高ぶっているが、自然破壊など、しつかり歯止めができないのなら、何か、ささやかな原因が、引き金となり、アツと云う間に絶滅への坂道を一直線に駆け落ちていく……と言つことも十分考えられる。それに、全く未知数であるが、もし、我々現世人類の遺伝子の中に、「種としての寿命」のようなものが、奥深く刻み込まれていたとしたら、正に万事休す。地球が抱えきれないほどに、増えすぎた人口・資源枯渇・温暖化・疫病・そして愚かにも過剰備蓄した核兵器、どれを取って見ても、滅亡への誘因となりうるものばかりである。

ホモ・サピエンスとは、「智慧ある人」という

意味だが、一体、現世人類のどこに「智慧」があるというのであるのか？ 名前を返上しなくて良いのか？ 超楽天家の私が、こんなペシミスト（厭世家）みたいなことを並べ立てるのもちよつと変だが、あまりにも、世界秩序の乱れに、憤りを禁じえない。】

さて脱線が過ぎた。縄文人に戻ろう。

新人（ホモ・サピエンス）は、エチオピアを七万年前に出て、紅海を渡り、アラビア半島に進出。一群はインド方面へと歩を進め、ヒマラヤ山脈の南回りでアジアに定着。他の一群は、アラビア半島から中東を経て、四万年前ヨーロッパ方面へ進出した。コーカソイド（白人）と別れ、ヒマラヤ山脈の北回りでアジアに定着。両者はモンゴロイドとして我々の祖先となる。そして二・三万年前、アジア大陸の東端にある日本列島が、大陸と陸続きだったころ、南回りで、たどり着いた南方系の縄文人の祖先と、カラフト 北海道經由の北方系縄文人の祖先とが、旧石器文化を携え、この日本列島に定着し、その遺跡数は、優に一万年に達するといふ。

縄文時代と呼ばれるのは、今から一五〇〇〇年前から二九〇〇〇年前までの、ほぼ二二〇〇〇年間の時代で、それ以前の旧石器時代は、明らかな石器という文化を残した。正に人類史の、黎明期である。石器時代の初期の頃は、一つの石斧が、次の段階に発展するのに、一〇〇万年も要するほどの超スローペースであった。勿論生活様式は、遊動的な狩猟採集生活である。

そしていよいよ今から一五〇〇〇年前、旧石器人は、遊動生活から、転々としていた夜毎の罫（ねぐら）を、一つの場所に定め、初めて、家族が寝

泊まりする「家」というものを造る。これは人類史上、正に一大革命であった。この「家」が集まり、自然の中に隔絶された区画、即ち「村・集落」ができる。野性的な遊動生活から、高らかに「人間」を宣言した場所である。これこそが、人類が以後、急発展していく文化・文明の発祥地となっていく。細々したことは、専門書に譲るが、石器時代から、なだらかに「石器」の時代へと移行していく。石器の表面に手で編んだ「縄」をこころがし、圧着して、文様をつけた「縄文土器」である。

縄文土器は、後の「弥生土器」の装飾性に対し、「物語性」に富むという。器としての機能性は極めて低く非能率的で、色々な突起をつけたり、底が狭く不安定で、口も波打ち、器としての機能は余り果たしていない。頑固なまでの執着性・そこに縄文人の哲学があるという。

さて、器はともかくとして、縄文人の「心」を表す、色々な遺跡が発見されている。

宮城県田柄（たがら）遺跡には、イヌが埋葬されていた。しかもこのイヌは、老死で、おそらく狩猟などで傷付いた骨折治癒の跡がある。しかし、そのイヌは、殺されたり食べられたりせず、寿命を全うするまで飼育され、死ねば、丁寧に埋葬されたのである。家族の一員としての取り扱いである。後の弥生人がイヌを盛んに食べていたのとは、大きな差である。

栃木県寺野東遺跡は、一六五メートルの環状の土盛遺構で、南東方向の筑波山頂から、冬至の日に朝日が昇るのが見えるように構築されているという。このように縄文人は、富士山を始め、近隣の「山」との関わりで、二至二分（冬・夏至、春・秋分）に合わせて建造物を構築した、高度の天文観測な

どの技能を持っていた。

縄文人は、遺跡の数、密度などから日本列島におよそ、一〇万人ぐらい住んでいたと推定されている。そして今から二九〇〇年ほど前、朝鮮半島などを経て、稲作を携えた弥生人が、大挙（一〇〇万人）押し寄せて来る。穏やかに暮らしていた優しい縄文人を圧倒し、戦に明け暮れる、好戦的な日本人へと、変転していった。

弥生時代を経て有史時代を迎えると、全国至る所に、戦勝で肥大化した大王の墳墓や、戦の神を奉った社が、むやみやたらと増えていく。縄文人の優しさは、どこへ消えたのか？

やさしさをみた

伊東弓子

今年もお盆さんがやってきた。寺ではお盆は大きな催しの一つで、寺の者には一家総出の大層な仕事量である。それこそ猫の手も借りたほどである。私自身、寺に育ったこともあって、その大変さは尋常ではないと思っっている。お盆さんがやってくると、愚痴をこぼしている暇があったら、ドンドンやるべきことを片づけていかないと、お迎えが出来なくなってしまうのだった。私はというと、家の中の細々とした仕事に苦手であったことから、専ら掃除など外回りの

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第10回定期公演

## 「悪路狼夢(オロロム)の歌」

10月19日(日曜日)午後2時開演)

私が死んだら、この御魂を天の神《シカシマ・カムイ》のおわす森にそちの手で帰してくれぬか・・・

ことば座第10回定期公演は、常世の国の恋物語百/第16話として「悪路狼夢の歌」をお届けいたします。

悪路王と恐れられた悪路狼夢(オロロム)は、信頼すべき敵将・坂上田村麻呂に言い残して河内国杜山で斬殺処刑された。田村麻呂は、悪路狼夢の首を密かに桂村高久の鹿島神社に安置し、時を凶って鹿島神宮に祀ることを考えた。しかし、悪路狼夢の首は坂上田村麻呂の手で鹿島神宮に祀られることはなかった。しかし、悪路狼夢の御霊は八百年後、子孫の手で首彫として鹿島神宮に奉納された。

小林幸枝が、矢野恵子の打つ古代リズムと

琴の音にのって永遠の愛を舞う！

(講演料金) 前売券 2500 円、当日券 3000 円、小学生 1800 円

前売券は、ギター文化館(0299-46-2457)および

いしおか補聴器(0299-24-3881)にて取り扱っております。

仕事を手伝っていた。

嫁いでからは、仕事中心の生活と、姑とは少し離れた所に住んでいたこともあって、お盆さんのお迎えごとの大半は姑まかせであった。姑が亡くなった後も、姉が引き継いでくれたおかげで私は簡単な手伝い程度に済んでいたのだ。しかし、その姉も昨年旅立ち、今年からは私がすべて一人で行わなければならなくなった。

大きな責任を負わされたような気持で、梅雨明けの頃から準備を始めた。

家の周りの草刈り、草取り、墓掃除、家の掃除、実にたくさんの用があるものだと、今更のように母と姉の苦勞を思った。

お盆が近付くと買い物、庭の燈籠立、盆棚づくりと進めていく。ひとつひとつ仕上がっていく満足感のようなものがあった。八月に入ると地域の人と共同墓地に通じる道を掃除した。草薙、道薙と言つて、ご先祖をお迎えするために「迷わずおいで下さい」と道を奇麗にする共同作業である。

お盆さんの準備が出来ていく中で一番戸惑ったのは盆棚づくりであった。六十何年もお盆さんを迎え、盆棚の前に座った筈なのに、記憶が薄く曖昧なのである。胡瓜と茄子、位牌、香炉、蠟燭、鬺伽水、水の子等の位置がそれぞれ落ち着いた時の喜びは自信にも繋がっていった。

盆中は訪ねて下さった人、親戚の人、家族の者達とゆつくりと話をすることができた。話す時間は短くとも、死者を交えての共通の話題を作れた事は、盆の行事の意味を改めて考えてみる良い機会でもあった。私の接待の手際もスムーズに運び、主婦の座についても色々感じるものがあった。

四日間があつたという間に過ぎてしまった。送り

盆の朝は、盆棚をかたずけた後、長い事私たちの代理としてやってもらった弟夫婦に、兄嫁として礼を言い勞をねぎらった。

「お父さん、お母さん、裕ちゃんまた来年来て下さいね」

と素直な言葉で三人にお線香をあげる私は、古臭い言い方もしれないが、嫁として初めてお盆さんを成し遂げた安堵に包まれていた。その煙の中に舅、姑、妹を見、その思いを持つてお墓に届けた。

十六日は数入りの日。午後お寺で観音講がある。部落の女達が集まって住職と一時を過ごす。唱える観音経は境内の蝉との合唱となつて流れる。

お経の中にある「親と子の道」のお話などを頂く。ちくりと心を痛める一節など日頃の生活態度を反省する点もある。日頃噂話や愚痴三昧に明け暮れしている女達の表情も佛の前ではとてもいい顔になる。その後のご馳走は美味しかった。お盆中大勢の人の接待をした女達への勞いの膳であつたから有難くいただくそれぞれは笑顔に溢れ、声が弾んでいた。

送り盆をした日は旧七月十六日。夜の満月が美しくかつた。沢山の魂があのに帰つていった事だろつと月を眺めた。生きている私等は明日から現実の生地獄の中で足掻いていくのだ。せめて今夜は風に酔つてみたいと思つて暗に包まれている私急に胸に込み上げてくるものがあった。お盆さんの一つ一つの中に「やさしさ」が流れているのに気がついたのだ。それは亡き人に対して、また生きている人に対してもあつたかきものだと思つた。

盆綱引きも、盆踊りも、地域の心を育ててきたよい催しだった。盆棚の胡瓜と茄子の牛や馬への

思い、水の子の供え物の中にみる亡者へのおもい等、数限りない。

「お盆さんこそ敬老の日であり、父の日母の日であり、子供の日なのですよ」と子育ての講演で聞いた事も心の中にあつた事を改めて思い出した夏であった。

それにしても人の死後のことで二つ三つ気になることも感じた。若い夫婦のお宅へお邪魔した時「忙しい毎日でお盆どころじゃないんです」との一声だった。両親の遺骨はお寺に預けてあるから安心とのこと。位牌は埃を被っている。水をコップの底に下っている。花も色褪せて首を垂れていた。せめてと香で浄めてお参りした。道端の会話の中にも驚くこともあつた。最近電車の網棚にお骨が置かれたりばなしになつている事が多いそうだ。持ち帰つても墓地を求めする事が大変だという由らしい。「忘れもの」という遺留品になつていく人の末路。或る町の共同墓地の一画で立札が目に入つた。「ここに埋まつている物は汚れた肉体です。手を合わせたりしないで下さい」と書かれていた。ああこつという考え方もあるのかと思ひながらもここにいる人の人生を忍んで頭を下げて通り過ぎた。今、親子の宗教感、価値感の違い、他いろいろな理由で一人の死にまつたてさまざま状況がうまれていく。

形にとらわれずという言葉もよく耳にする。私は今までそういう生き方をしてきました。どれ程の人が迷惑を被つてきた事だろうと反省もしています。迷惑ついでに最後は一つの形にそつて阿弥陀様のもとへ送つて欲しいと願つたのです。送つていただいても阿弥陀様の言うことを聞かず自由きままにしていることでしょうか。生きている時行か

れなかつた世界中を風に乗って飛んでいることでしょうか。(でも今好評の歌の主人公とはちょっと違います)年に一度いや二度三度もどつてこられる場所が欲しいです。それは今年経験したようなやさしさのある所へ。そこには必ずさういふ心をもった人達が居る所であつて欲しいと願っています。

悪路狼夢 (オロム)

小林幸枝

八月公演が終わつて直ぐのこと。十月公演の台本執筆のための取材で、白井さんと私の両親をつれて鹿島神宮に出かけてきました。

鹿島神宮に行くのはもう何年か振りのことでした。鹿島神宮には、宝物館に展示されてある悪路王の首像を見ることが、神宮の森を見ることが目的でした。私は、鹿島神宮に宝物館のあることや、そこにアイヌの酋長と言われる悪路王の首の像が保管・展示されていること等、全く知りませんでした。だから勿論、悪路王のことも知りませんでした。

悪路王は、アイヌの勇敢な酋長であるアテルイだと言われていますが、本当のことは分かっていないそうです。出かける前に、白井さんから悪路王に関する資料をいただいたのですが、謎だらけの話で、資料も少ないのだそうです。

十月の公演では、このアイヌの酋長アテルイと悪路王の首の像が何故、鹿島神宮に奉納されたのかという新説の物語「悪路狼夢」です。

朗読舞物語の悪路王は、六月の公演で演じた異

説「三味塚古墳」の続編のような形で創られています。悪路王は、縄文人蝦夷の勇者「奈女比古」の子孫で、名を「悪路狼夢(オロム)」。

鹿島神宮の悪路王の首像を見学した数日後、今度は、悪路王の首像がもう一体祀られてあるという桂村高久の鹿島神社に、音楽担当の矢野恵子さん、舞台装飾の兼平ちえこさんも一緒に行きました。

桂村の悪路王の首像は、鹿島神宮よりも古いもので、桂村では最初、悪路王の首は塩漬けだったと伝えられているそうです。鹿島神宮の像とは全く違う顔つきで、こちらの首像は幽鬼溢れた暗い表情の像です。初めは本物の塩漬け首だったというのを納得させるような風貌です。

白井さんが、舞物語として着目したように、悪路王とは謎めいて不思議な想像をかき立ててくれる人物です。

桂村高久の鹿島神社では、矢野恵子さんの打ち鳴らすパーカッションにのって、形だけの舞奉納をしてきました。

白井さんからはよくこの常陸国は物語の宝庫なんだよ、と言われますが、こうして歴史を訪ねてみると、茨城に生まれ茨城に育つたくせに何も知らないことが悔やまれてきます。

今私にできることは、朗読舞というこの常陸国に生まれた舞台表現を精いっぱい体に表すことだと思っています。

嘘八百の作り話! 結構じゃないか。物語を捨てた受験勉強の年号暗記の歴史よりも、明日に夢の紡げる嘘八百の夢物語の方がよっぽど万歳だ!の白井さんの声に後押しされて私も大風呂敷に悪路王と悪路狼夢の物語を舞います。

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけはいけないのです

医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。 お気軽にご相談下さい。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2 1 5 8 6  
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

六月に「ふるさと“風”の同人である「ことば座」の皆さんは「三昧塚古墳」をテーマにした創作朗読舞をギター文化館で公演した。

三昧塚古墳は大陸とは無縁の霞ヶ浦湖岸にあるのに馬の飾りが沢山に付いた「金銅製の冠」が出土したことから、古墳の主が古代陸上交通を支配した人物の墳墓に比定されている。

その冠が「スキタイの冠に酷似している」とした歴史学者のことは「ふるさと“風”」第十五号でも触れたが、大陸騎馬民族の文化が早々と日本に入ってきて、常陸国（玉造）まで伝わる可能性が考えられなくはない。石器時代だからといって石器ばかり見てもダメ！」と、ある高名な歴史学者が発言しておられる。

「日本の古代文化は西の方から来た」と言うのが一般的な概念であろう。縄文文化の偉大さを見せる三内丸山遺跡が現れて、稲作などは東北地方からの伝来説があるけれども、「大和朝廷」という化け物は全てを自分の手柄にしているから、日本の歴史に真実が伝わらなかつた。

三昧塚古墳はスキタイの冠も、或いは北方騎馬民族から日本海を経て霞ヶ浦湖岸に伝来したかも知れない。時代的には三百年ほど後になるが齋明天皇六年（660）に阿部比羅夫が船二百艘で、多分、ウラジオストク辺りに上陸して

北方騎馬民族を討伐しに行った記録がある。

従来の観念では大陸の文化がシルクロードから中国、朝鮮半島、九州、近畿に伝わったことになっている。それらの文化が大和朝廷勢力圏の最前線になる常陸国に来たことは予想されないであ

ろつか。東海道の最東端になる「石岡駅」が金丸町に置かれたのは遅くても西暦六五〇年頃であろう。そして大和朝廷にとって当時、最大の課題であった「蝦夷征伐」の拠点である常陸国府には重要な人物が派遣された。

「無いものネダリ」になる恐れはあるが古代史の闇の中から「伝わってきた何か」を探し出すことが「ふるさと“風”」が目指す「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造」であると勝手に決めて、日本文化の源流とも言つべき「シルクロード」に焦点を当ててみようと思う。序でと言うと失礼だが、三昧塚古墳に関わる騎馬民族にも「挨拶だけはしておく。

中途半端だった万里の長城を完成させた秦の始皇帝は、紀元前240年代の半ばに即位したとされている。万里の長城は北方から侵入して来る異民族を阻止するために建造されたのであるが、手間と費用と年月をかけた割には役に立たなかつたらしく、「長城族」と呼ばれた議員がいたかどうか知らないが、日本の無駄な高速道路のようなものだったらしい。

北方異民族は騎馬民族が主体であつたらう。馬は城壁を越せなくても人間は何か苦心して侵入してくる。全長が2700kmも有つては護るほうが大変である。中には守備を疎かにする兵士もいたとかで敵は何度も入ってきた。

騎馬民族で知られているのはモンゴルであるが歴史は浅い。古くから居たのは「東の匈奴（きょうど）」と「西のスキタイ」である。このうち匈奴が万里の長城付近に頑張っており、スキタイはロシアのコーカサス、ウクライナ地方から南下して来てキャビアの産地・カスピ海沿岸部で「騎馬

遊牧」と呼ばれる暮らしをしていた。

スキタイは紀元前に滅びたようだが、その遺跡からは何処で作つたのか多数の「金製品」が発見されている。騎馬民族は金が好き、と言うより遊牧途中に銀も無いから貴重品は身に付けて歩いた。権力者の遺品は遺跡に残される。

スキタイの一派で、シリア王朝の衰退に乗じてイラン高原に進出し紀元前246年から同247年に建国してから四百年以上も続いた「アルサケス王朝・パルティア」という国がある。

パルティアの建国は、何でも神様の所為にしてきた昔の日本史では、孝靈天皇の時代になるが、初代の崇神天皇が初めて大和に進出してきたのが古墳時代初期頃のものであるから孝靈でも幽霊でも「弥生時代」に一括するしかない。中国では秦の始皇帝の即位と同時代になる。

パルティアは全盛期に現在のイラク、イラン、アフガニスタン、パキスタン辺りを領土としていた。その遺跡からは、スキタイと同じく「金製品」が多量に出たが「国家」としてはどのような国だったのか、極めて断片的な史料しか見つからないのだそうである。

その貴重な「パルティアの史料」で、精強なローマ帝国の軍勢を悩ました軍事を窺わせる「草原の狩の図」の壺が、どういつか奈良の正倉院御物にある。遊牧民族であるから騎馬は得意、弓も上手で、疾走中の馬上から振り返りざまに騎射で敵を倒す「パルティアンショット」の図柄である。この壺は称徳天皇（国分寺を建立させた聖武天皇の娘・孝謙天皇）が東大寺に寄進したものと伝えられている。

馬の冠にしてもパルティアの壺でも、日本とい

う遠い島国に大陸の騎馬民族文化がよくぞ伝わったものだと感じる。それらの大部分は中国大陸から或いは朝鮮半島を経由して日本に来たのである。冒頭に述べたようにスーパーの「冷凍餃子」などを見て我々が推測するような単純な経路ではなかった筈である。

二十年ほど前に奈良で「シルクロード博覧会」が開かれた。私は就職中だったから、週末に奈良一泊で要所だけを見学し幾つかの資料を仕入れてきた。その中の「シルクロード歴史地図」には陸路、海路と網の目のように張り巡らされた交易路が記録されていたのである。それまでは単純にシルクロードは一本の道」とばかり思い込んでいたことが恥じられる。

「古代人の交易」というのは「ロジスティック」などと小難しく表現される現代物流よりも遙かに発達していたようである。世界四大文明のうちで、モエンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡などのある「インダス文明」だけは文字が解読されていないため、築いた民族が分からなかった。近年はインド東部の「ドーラピーラ遺跡」が発見されて、その研究から「インダス文明は交易の民の拠点」であることが明らかになった。

ルーブル美術館の貴重な所蔵品に紀元前2500年くらいから興った初期王朝時代の碑文の断片がある。「禿鷹（はげたか）の碑」と名付けられ、メソポタミアの都市国家ラガシユの王が隣の町（都市国家）ウンマと戦争をして勝った記念の碑であると考証されている。

ラガシユの町の守護神「ニンギルス」が何のオマジナイか、「アンズー鳥」という聖なる鳥を挿んでいる図柄であるが、その鳥の像の実物がシリア

の首都ダマスカスの国立博物館にある。約四千年前にユーフラティス河沿いに栄えていて、バビロン王朝に滅ぼされたマリ王国の遺跡から出土したものとされる。

アンズー鳥は獅子の顔をした鳥で、頭部と尾は金で出来ているが胴体と羽はラピスラズリ（青金石・瑠璃とも呼ばれる貴石）製である。ラピスラズリはメソポタミアに無かったから原産地のアフガニスタンから運ばれたものとされている。そして、シルクロードは未だ無かった。

「シルクロード」については専門の学者が多くの著書を出されている。その中で「講演を聞いたことがある」という理由から、早稲田大学教授（当時）長澤和俊先生の「シルクロード」に拠らせて頂けばメソポタミアに興った農耕、牧畜、彩文土器、磨製石器、紡織術など「古拙文化」とよばれるものが紀元前五千年頃からユーラシア大陸の各地に広がり始めた。

紀元前二千年紀には遊牧民が草原地帯を回るようになり、さらに「玉（ぎょく）」やラピスラズリのような高級品の交易路が定まる。そうしたことがシルクロードの土台になったという。なお、長澤和俊教授は、有名な三蔵法師玄奘の伝記を翻訳され、三蔵法師の足跡を「大唐西域記」よって考察された方である。

「玉」とは瑪瑙、碧玉、玉髓、琥珀、滑石、蛇紋石などの加工装飾品で、日本の神話に言う勾玉もそうであろう。西域と呼ばれた現在の新疆ウイグル自治区で採れて、西安から河北省安陽県にあった殷（いん）の都まで運ばれた。

ラピスラズリはアフガニスタンからイラン高原を抜けてチグリス・ユーフラティス両河を渡り

メソポタミアに普及してからシリア砂漠を横断してシナイ半島経由でエジプトに行った。

玉の産地とラピスラズリの産地とは離れており需要が東西に分かれていたから、その間の交易路は繋がっていなかったが、アッシリア商人の存在や鉄の発見と伝播、そして騎馬民族の往来などがあり、交易路とは言えないまでも駱駝、牛、馬に頼った初期の物流は考えられる。

NHKの「古代オリエント史」では、アレキサンダー大王の東征で古代オリエント文化が一旦は消滅し、ギリシア系王朝によるヘレニズム文化がエジプト、トルコ、イラン、パキスタン、シリアなどに広がったが、中央アジアに居たイラン系遊牧騎馬民族が民族意識に目覚めて次々に国を興したという。代表的なものが先に述べた「パルティア」と「クシャーン王朝」である。

クシャーン王朝はバクトリアと呼ばれた現在のアフガニスタン北部、タジキスタン、ウズベキスタン南部に興ったイラン系王朝であり、中国では「大月氏」と呼ばれた。漢民族が手を焼いていた匈奴に追われて西に来たのである。やがてインド、パキスタンに侵入したクシャーン王朝は、衰退していた仏教を保護し、遺跡で有名な「ガンダーラ」などに仏教文化を發展させた。

その頃つまり西暦紀元前後の世界は東に「漢」の国があり、西は「ローマ帝国」が支配していて中近東では「パルティア」と「クシャーン」の両王朝だけが国らしい国であった。老舗のエジプトはギリシア人社長クレオパトラの経営が失敗して倒産しローマ帝国に併合されていた。

他はインドにローマと商売をしていたアンドラ王朝があるだけ、日本などは弥生時代の始め頃で

恐らくは中国大陸か朝鮮半島から逃げてきた王朝が九州に存在していたかどうか。昭和二十年までの歴史では垂仁天皇時代だとしていたが實在に疑問もあり、三百年以上も早すぎる。

ローマ、パルティア、クシヤン、漢の四つの国は領土拡張を目指して争っていたが、自分の領土内は安全を保ち、国土を整備し、交易を勧め、文化を保護していた。今の日本のように国民を蚊帳の外に置いて、国会議員だけが勢力争いを楽しんでいるようなことは無かった。

交易は、これらの四か国の道を繋ぎ、やがてシルクロードの母体となるのである。特にパルティアは現在のイラン中西部から東トルコに至る五千キロに近い「王の道」を整備していて、その様子を実際に旅行したギリシア人が「パルティア駅通誌」という記録に残しているという。

勿論、ガソリン税で造った道路ではない。既に述べたように、シルクロードは一本の道ではなく、奈良シルクロード博覧会の資料でも大きく分けて陸路と海路があり、陸路もオアシスと草原の道、仏教伝来の道に分けられている。長澤和俊教授は、シルクロードの概念として次のような経路を示しておられる。

基幹となる西への道は、中国・西安から敦煌(とんこう)までは一筋で、そこからタリム川沿いの楼蘭までは南北二道となり、一度楼蘭で合してからタクラマカン砂漠を挟んで南道と北道に分かれ、北道はフェルガナ(大宛)と呼ばれた旧ソ連領のキルギス、ウズベクから二筋になって黒海へ抜ける道とコーカサスへ抜ける道になる。この二道はイスタンブールに出る。

一方、南道はイランに入ってイラン北道とイラ

ン南道に分岐して西に向かう。イラン北道はホラサン地方(カスピ海南岸)を西進してアナトリア(現在のトルコ)を通過する。イラン南道の方はアフガニスタン南部、イラン高原、メソポタミア南部、バクダッド、シリア砂漠と進んでパレスチナ地方(イスラエル)が奪ったので今の地図には無い)に到達し、後は船で行く。

これら東西の道に南北の枝道が付いて発達した流通路になるのだが我々の感覚で一般に「シルクロード」と言えば「砂漠の道」のイメージしか湧いてこない。「生きては帰れない」と言う意味のタクラマカン砂漠に始まり、パキスタンとインドに跨るダール砂漠、イラクのシャミヤ砂漠、イラン高原のルート砂漠、カビール砂漠、そして広大なシリア砂漠と、イラン南北道だけでも砂のサーピスは充分であった。

砂漠地帯には蠍(さそり)も居れば毒蛇も棲んでいる。何よりも方角が分からず夜は極寒で日中は極暑、水が無いから「生還できない」のである。負け惜しみの強い国では、棗椰子(なつめやし)の実(デーツ)とオレンジとナン(竈に貼り付けて焼く薄いパン)があれば一週間は砂漠で生きられると言う者もいる。

確かに乾燥させた棗椰子の実は高カロリーで非常食にはなるが、それで助かるのは過酷な環境に適した人種のこと、日本人などは一日でミイラ化する。人間は駱駝とは違うのである。

その昔、イスラム教祖のマホメッドが未だ心服しない遊牧部族と戦闘を交えていた頃のこと、ある遠征に二人の妻が従っていた。イスラム教では布教に伴う戦闘が多く未亡人も出る。その救済策として複数の妻帯が許されていた。

## 「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会

をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

兼平 ちえこ 0299-26-7178

打田 昇三 0299-22-4400

伊東 弓子 0299-26-1659

砂漠地帯での戦闘が終り帰還する途中で軍は休憩した。マホメットの親友で長老のアブ・バクルの愛娘であり、最初の妻が死亡した後に何十歳という年の差を越えて結婚したアイシャという妻も駱駝駕籠に乗って従軍していた。他の一人の妻はマホメットの従姉妹で、アイシャにはライバルに相当する女性である。

休憩中にアイシャはトイレに行った。砂漠だから少し離れた場所で用を足しただけのことであるが、そのときに瑪瑙の首飾りを落として拾いに戻ったので遅くなった。堂々と「便所！」と宣言して駕籠から出た訳では無いから、お供の者たちは知らずに出発してしまつて、アイシャは一人で砂漠に取り残されたのである。

マホメットは十九歳のアイシャの腕の中で臨終を迎えるのだが、それが五、六年先のことで、砂漠に孤立したのは中学生ぐらいであろう。普通なら慌てふためき泣き叫ぶ。しかし戦場にも行き、美戦にも参加する女傑は落ち着いて動かず、その場に座り捜索隊が来るのを信じて待つ間に砂の布団で眠ってしまった。

途中で駕籠がカラなのに気がついたのは一人の供である。急いで駱駝を引き返し、砂漠で穏やかに眠っているアイシャを発見した。本拠地のメデイナに戻ったマホメット軍は、アイシャが居ないので大騒ぎになったが、深夜、駱駝駕籠が無事に戻ってきた。「良かった！」で済む話だが、「世界の歴史(河出書房)」によれば、これが大事件に発展してしまつた。

表面上はマホメットに従うように見せつつも事あらば、その地位を奪って部族を支配しようと企む一派が、アイシャの事件を利用したのである。

問題になったのはアイシャが美人で、迎えに行ったお供のニイチャンが生憎と美男子だったことである。身近な敵は「美男美女が人目の無い砂漠を一緒に行動したのは怪しい！」と昨今のテレビドラマのような安っぽい発想でスキャンダルを流した。

他のマホメット夫人(序列の低い)たちも、日頃からアイシャを嫉んでいたので、この時とばかりに怪情報新聞を配って歩いた。さらにマホメットの従兄弟で、娘婿でもあるアリーが「アイシャ程度の女性は幾らでも居るから、真相を糾明したほうが良いですよ」とけしかけたのである。マホメットもアリーの父親である叔父には大きな恩義があつたため、怪情報を聞き流す訳にもいかなかった。

アイシャは事件(噂)を知り大いに嘆き悲しんでいたのだが、自分ではどうすることも出来なかつた。そのような時に「アイシャ様に限り、決して噂のようなことはございせん！」とアッラーの神にかけて弁護してくれたのが、一番のライバルと思われていた女性であつた。マホメットも自分の従姉妹でもある妻の証言に疑念を捨て、事件は無事解決した。

後にイスラム教はスンニ派とシーア派とに大きく分かれ、両派は現代でも対立している。シーア派はマホメットの血筋を引くアリーを正統とみなす。この人は本来ならばマホメットの死後、直ぐに後継者に推されても良い立場なのだが長い間、その地位に就けなかつた。原因はいろいろあるが、「砂漠のトイレ事件」でマホメットに疑いを持たれたアイシャが心底からアリーを憎んでいたことも一原因であろう。砂漠は世界の歴史を変える

力を持っている。

「イスラムの女傑・アイシャの危機」事件はアラビア砂漠とオアシス都市メデイナでのことであるが、話をシルクロードに戻してイラン南道でメソポタミアを通過するルートを迎ってみると現在、世界中が注目するバクダッドからユーフラティス川左岸を進んで地中海東岸に達する途中にシリヤ砂漠がある。

シルクロードは主に絹を運ぶため西安(又は洛陽)とローマとを繋ぐ道とされるから「イラン南道」も最初はティグリス川沿いに北上し現在のトルコ・シリア国境付近から西進してアレppoに出ていたと思われる。しかしローマ帝国の版図拡大によりエジプトやエルサレムがローマの属領になり、それぞれ総督が置かれると直接の交易路が欲しくなる。そこでシリア砂漠の北端を横切るシルクロードが造られた。

「古代文明の起源」とされる「肥沃な三日月地帯」というのはエジプト、メソポタミア、アラビア半島を言うらしいが、その範囲は学者の間で意見の違いがある。専門家に叱られる覚悟で地図を見ると、ティグリス、ユーフラティス

両川を囲むようにタウロス山脈、レバノン山脈、ザグロス山脈、アララト山などがあり、イラン高原にはエルブルス山脈もあるから、難しいことを言わなくても降った雨は川になるか、地中深く浸透して何処かに出てくる勘定である。

アラビア半島ではマホメットが拠点としたメッカ、メデイナが有名なオアシス都市だが、シリヤ砂漠には「タドモル」と呼ばれたオアシスがあり、古くから遊牧民には知られていた。

タドモルは標高450mの高地にある。砂漠だ

から当然ではあるが、年中、風が吹いている。それでなくても過酷な砂漠で高地とあっては、水を飲み寄つても、人が住める環境では無いと誰もが思う。何時の頃からか、そのタドモルに住み着いた部族がいた。ほん二千年ぐらい前に肥沃な三日月地帯に侵入して拡散したとされる半遊牧民族アラム人の一派である。

実はタドモルには温泉の湧く場所があった。今は温泉も涸れているようであるが、棗椰子の樹林を形勢するオアシスなのである。住み着いた部族はバーム(棗椰子・ギリシア語ではバルミラ)と呼んで、いつしか、それが町の名称になったのが歴史のある名前のタドモルも捨て切れず、地図には両方が書かれている。

タドモルは、アッシリア帝国や新バビロニア王国、アレキサンダー大王、シリア王国(セレウコス)などに支配され続けたが、水を求めて集まる遊牧民は絶えなかった。シリアの首都ダマスカスから250kmも離れた砂漠の中にあるオアシスに、幾ら温泉が湧いても定住する変わり者は限られるけれども、住み着いた部族は木陰で冷たい水や砂漠の食品デーツ(干した棗椰子の実)などを売り、公衆浴場のような商売もして細々と暮らしていた。

その中に次々と支配者が衰亡し、新しい交易ルートが出来ると条件が一変した。バクダッドからエルサレム、そしてエジプトへ抜ける最短の道がシリア砂漠に通じ、その中間点にあるオアシスの価値が急上昇したのである。

ユーフラティス河畔の隊商宿からダマスカスまでは500kmもあり過酷な環境、駱駝の体調や強盗団の出没などを考えれば、途中での一泊は何

物にも換えがたい。商売に長けたタドモル人は早速、オアシス内にキャラバンサライを建てた。タドモルの町は黒字財政となり、市制を施行し周囲に城壁を築き警察や軍隊を組織し税務署を設置し、市場を開設した。東方進出の野心を持つローマが支援したとも言われる。

続々とやってくる隊商は先ず城壁の外で待機させられ宿泊料金と商品の税額を交渉することになる。課税は売春婦にも及んだらしい。不条理だが世の中は都合良く出来ているもので城壁の外では夜勤の強盗団が隊商の列を狙っているから、宿泊料や税金が少し高くてもOKを出して町に入れて貰うしかない。

町に入れば安心して休息できる。温泉につかり酒でも飲み、その筋の女性がニッコリ笑えば、それから先まで行くのが面倒になる。町の市場では隊商から商品を買ひ叩き、それを別な隊商に高く売って利鞘を稼いだ。

そのうちにタドモルでも隊商を仕立てて交易を始めた。東西交流の品物は多いが、目玉となるのは中国の生糸と絹、ローマの珊瑚とガラス器、ワインやオリブ油、アフリカ大陸の象牙と香料、アラビアの真珠と羊毛、中東特産の胡桃、胡麻、大蒜を始めとする植物やチーズなどの乳製品その他である。奴隷も売買された。

タドモル自体も地場産業で金細工を始めた。これも評判が良く儲けは莫大で大都市は忽ちにして小さいながら一つの王国に成り上がった。王になったのは族長のオデナットで王国はパルミラと名乗った。パルミラ人は自らも文字を創り、文化的にはギリシアとローマに見習ったが、日本にも伝わったパルティア美術が影響していると言われる。

特徴的なことは「墓所」にある。

昨今は日本でも死者の遺骨をBOX形式の墓に納めたりするが、パルミラの墓所は石造のビルで内部が棚になっており、多くの遺体が収容できる。遺体はシルクロード伝来の中国の絹で覆われたりするが、ローマ帝国の支配後はカタコンベと呼ばれる地下墓所に変わったらしい。恐ろしいことだが、現在はイラクからの石油パイプ

が地下墓地群の上を通り、国道が通過している。交通量の増加で道路が陥没し、何百という遺体を収容する墓が発見されたりした。

平成七年(1995)秋、日本の代表として始めてシリアを公式訪問した社会党出身の首相がパルミラ遺跡の荒廃を慨嘆して「世界的遺産パルミラの復興に日本政府が協力する」と声明を出した。問題は、その首相声明が実行されたかどうかであり二年後にも実行されていない。予算や手続きの都合も有るだろうが、忠実な犬でも「おあずけ!二年」では主人にさえ噛み付くと思う。日本が中東外交を粗末にしている例である。中東は日本文化の原点なのである。

パルミラが王国に急成長する頃、パルティアは地中海東岸への進出を巡ってローマと睨み合いを続けていた。侵略する強國の狭間で生き残る術は、奴隷になるか軍事力の強化しかない。日本のように国境の無い国では念仏に「平和」を唱えてさえいれば無料で安全が保障されると思っているが、中東ではそうはいかない。

パルミラは遊牧民らしく騎兵を中心に軍備を整えたが、砂漠での行動を考えて駱駝部隊も組織した。「パルティアンショット」を考案したアルサケス王朝パルティアは、パルミラの軍備拡張を懸

念しつつも、ローマ帝国が共通の敵になると、たかが砂漠の都市国家を軽視していた。

パルミラの騎兵は疾走する馬上や駱駝の背からの射撃訓練を重ね、「パルミラ弓騎兵」と恐れられる兵力を保持した。パルティアとの違いは防衛に強い重装備騎兵も用意したことである。

ローマは地中海東岸への侵略を進める間に面倒をみながらも何度かパルミラ支配を試みた。クレオパトラに熱を上げたアントニウスも彼女へのお土産をタダで得ようとしてパルミラを急襲したことがある。情報を察知したパルミラは財宝家財一切合財を駱駝と馬で何処かに隠し、家畜の糞と蠍だけがローマ軍を出迎えた。ローマはパルミラ支配を諦め、辛うじて「自由都市」として準属国程度に扱う関係を築いていた。

西暦200年ごろになるとイランに興ったササン朝ペルシアがパルティアを侵略するようになった。この王朝はイラクのバクダッド近郊に都を置き、パルティアの全領土を支配すると共にシリア、ヨルダン、パレスチナ、トルコからエジプトにまで狙いを付けていた。東進を図るローマ帝国とは何処かで衝突することになる。

西暦259年、ペルシア軍が皇帝シャープール一世の指揮下に大軍を動員してシリアに進撃した。ローマ帝国は第三十一代に相当する皇帝ウァレリアヌスが自らシリア戦線でペルシア軍を邀撃し各地で激戦が展開された。そして翌年の戦闘では何と皇帝が捕虜になってしまった。

パルミラにしてみれば、ペルシアに付くかローマ側に立つか二択一を迫られた訳であるが、多くの史書にはパルミラ自身が勢力拡張を目指して積極的に参戦したように書いてある。

第三十二代ローマ皇帝になったガリエヌスは軍事協力を申し出たパルミラ王オデナットは、直ちにパルミラ弓騎兵を率いてペルシアの陣営に突入し、場違いの活躍でペルシアの大軍をユーフラテイス川まで押し戻してしまった。

ガリエヌスは「金をかけずに褒美を出す」方法としてパルミラ王を「東方におけるローマ軍の最高指揮官」に任命した。しかし、これがパルミラに莫大な利益をもたらし、またパルミラを滅亡させる原因にもなった。

ローマ帝国東方軍の最高指揮官はペルシア軍の侵入を阻止したが、任務内容を勝手に解釈して自分で周辺の都市などを支配し始めた。一時はトルコの西半分、エジプト北部、アラビア、シリア、パレスチナ、メソポタミア北西部などがパルミラの領土に組み入れられたのである。

パルミラ王オデナットの王妃ゼノビアは美人で聡明な女性と言われる。世界の美女と言えればクレオパトラ、楊貴妃、それに小野小町などが取り沙汰されるが、小野小町の場合は川柳でも女性とし

## ふるさと風の文庫

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の歴史エッセイ  
ふるさと「風にたずねて」( 〃 / 〃 ) (二冊組:1000円)

我がふるさとを“風のことは絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文集大成!!  
ふるさと「風のことは」 (定価500円)

### 日々の暮らしの中にふるさとを想う心を吐いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)

白井 啓治 「移ろう風の中に」 (二冊組:800円)

近藤治平 「風に吹かれて」 (二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、

・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

### 近日刊行

打田昇三「ふるさと風にたずねて」( 〃 ) (二冊組:1000円)

菅原茂美「遙かなる旅路」(1) (定価:500円)

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

て身体的欠点があるように扱われているから？である。それに代わる女性として登場するのは「ビルキス」と「ゼノビア」であろう。

文芸春秋社の「古代女王ものがたり」には六人の有名かつドラマチックな美女が登場する。ビルキスとゼノビアは当然含まれている。他の四人はクレオパトラ、ネフェルティティなど古代エジプトの女王・王妃である。

「ビルキス」は「シバの女王」のことである。ゼノビアは、オデナットに見初められてパルミラ王妃になったのであるが、生まれはアラビア遊牧部族長の娘である。母親はギリシア人とされているから、ゼノビア自身が「自分はクレオパトラの子孫」と称していたのは母系に依っているのであろう。

小野小町と違ってゼノビアはオデナットとの間に男子を儲けている。ただ、ゼノビアは二人目の妻であったから、ゼノビアの子は次男になるのが気に入らない（であろうと、推測する）

西暦267年、ローマ帝国の宿敵であるゴート人が中東のローマ帝国領内に侵入してきた。オデナットはこれを討伐する任務を請負い、トルコに出陣した。ゼノビアはローマに従う夫の行動が気に入らない。ローマの所為で自殺させられた祖先クレオパトラの怨念の仕業であろうか：これから先のこととは、各種の説があり、どれが真実かは分からない。デタラメの多い日本の歴史よりはマシなので一般的なサワリだけを述べておくことにする。

パルミラ王オデナットは200kmほど砂漠を進行してシリアの都市ホムズで反ローマ勢力を掃討し、トルコに向かおうとした。その時に自分の

身内に暗殺されてしまったのである。

暗殺者は従兄弟か甥か血縁者が重臣の一人か、この事件でオデナットの長男、つまり先妻の子も殺害された。自動的に未だ少年であるゼノビアの子がパルミラの後継者になる。少年王では心許ないから母親のゼノビアが政治を行う。

公文書に署名するのにも「王の母」ではギョチナイ。そこでゼノビアは「女王」として登録し、夫が持っていた名誉称号などを流用した。パルミラ国としては、従来の「対ローマ関係」を白紙として版図を拡大したのである。

当然ながらローマ帝国が黙っている訳は無いのだが、ゴート人に手を焼いているから暫くは女王ゼノビアの天下が続いた。この評判が広まると、ペルシアを始めとする周辺の国も強敵ローマの防波堤としてゼノビアに期待した。

西暦270年、ローマ帝国第三十四代の皇帝にアウレリアヌスが就任すると、事態が急変してきた。ゼノビアに馬鹿にされ続けていたこの皇帝は、ゴート人の始末をつけるや、一気にパルミラ討伐を開始したのである。ゼノビアの失敗は、この皇帝が智謀の将であることを知らなかったことである。

ダマスカスから300kmほど北の地中海寄りにあるトルコ領ハタイは、かつてアンティオキアと呼ばれたシリアの古都であった。なぜか現在でもシリアの地図にも載っている。最初のシルクロード（イラン南道）は此処から海路だったと思われる。ヘレニズム都市の一つで世界初のキリスト教徒が出た町として知られる。

パルミラの女王ゼノビアは、そのアンタキアでローマ軍を迎え撃ち見事に負けた。騎兵は金がか

かるのでローマ軍には少なかった。戦闘時には馬から下りて戦ったとも言われる。この戦いでも予め川岸に歩兵を伏せておき、囷（おとり）の騎兵をチラつかせてパルミラ騎兵集団を誘った。パルミラ軍を見たローマ騎兵は素早く退却して隠れた。追いかけるパルミラ騎兵隊には防御に強い重装備騎兵もいた。

調子に乗って追撃するうちに重い装備で馬がぐたびれた。川岸の村まで追いかけて敵の騎兵を見失い、馬も戦意を失ってボーツと立ち尽くすだけの隙にローマ歩兵が長槍攻撃をかけて多くのパルミラ軍を壊滅させた。この戦闘でパルミラの指揮官が討たれ、主力部隊が消滅した。

ゼノビアは側近に護られて戦場を離脱しユーフラティス川の上流を越えてササン朝ペルシア領内に逃げ込む寸前で捕虜になった。俄作りの王国は、此の一戦で瓦解してしまった。ゼノビアは「ペルシアに救援を頼んだのに来てくれなかったから負けた！」とぼやいた。

日本でも昭和二十年の終戦時に「敵が強力な爆弾を使ったから止むを得ず終戦する…」というような意味の勅語が出た。敗戦を他人の所為にするくらいなら最初から戦争などするな！

兜を被り紫の衣裳を着け馬に跨り自ら勇敢に戦ったゼノビアも、捕虜としてローマ皇帝アウレリアヌスの許に連行された。農家の出身で兵士から將軍、皇帝と登り詰めた勝者は、少し色は黒いが整った顔立ちのゼノビアを見て急に寛大になり、パルミラ王国への憎しみを忘れた。

女王の降伏を知ったパルミラ王国は一部の者が籠城して抵抗したが、あっけなくローマに落とされた。ゼノビアは見世物のように凱旋將軍の行列

に加えられ、大勢のローマ市民に恥を曝した。其の後に、別荘を与えられて穏やかに余生を送った（代わりに部下の將軍が処刑された）。これがA説、群集の前で処刑された。これがB説、祖先のクレオパトラを真似て自殺（絶食）した。これがC説、そして理由は知らずローマ皇帝アウレリアヌスは5年後に暗殺されてしまう。次の皇帝は任期が一年であった。

歴史は無駄が多い。ローマ帝国も東西に分離してから西は百年持たずに滅び、東はササン朝などに圧迫されて中東に留まった。実際には三百年近く存在したと思われるパルミラ王国は、悠久の歴史の中では「隊商都市」の格付けしかされず、遺跡は砂に埋もれてしまった。

やがてシルクロードの要衝・西アジアを支配するのはマホメッドが興したイスラム勢力であり、アイシヤも駱駝に乗って駆け回る。砂漠の砂は女性を強く美しくするのであるが。

別荘に住んだか、処刑されたか（大きな違いだが）、砂漠の女王ゼノビアがローマへ連れて行かれたのは、中国では「三国志時代」の末期になる。残念ながら日本の国らしきものが文字に記録されたのがその頃である。そして間もなく「古墳時代」という、特定の人物の墓だけに莫大な労力を注ぎ込み、肝心の記録は何も残さない無駄な時代が何百年も続くのである。

「パルミラの墓所」は狭い場所に多くの遺体を収容できる現代でも先進的な「棚式」である。砂漠地帯に僅か数百年間の繁栄を誇ったに過ぎず、世界史には「国家」としての記録も無い「パルミラ」の女王ゼノビアの物語が伝えられるのに、日本では「万世一系」などと冗談を言う割りに同時

代に生きた「歴史的人物」の消息が不可解な神秘性に閉ざされたまま固まった。

それどころか、マホメッドの愛妻アイシヤが砂漠で迷子になった事件まで記録されている時代に居た蘇我の馬子・蝦夷、聖徳太子などの地位や身分や実在性まで謎のままである。

悠久の歴史を刻むシルクロードと日本との関係を示す僅かな手掛りの「正倉院御物」には、天皇に持出されて紛失した物もあるが、先に述べたパルティアの壺を始め、インドの五弦琵琶（世界唯一）、西域の鞍褥（馬具）、アフガニスタンのラピスラズリの飾りを使用した紺玉帯（バンド）、ササン朝ペルシアの鹿文様屏風など、多くの異国製品が残されているという。

シルクロードを中心とする古代からの東西の道は日本列島に繋がっていた。日本民族は異国のものを取り入れて日本独自の文化を創り出したのであるが、権力構造が変わる度に歴史が書き換えられたらしく、建国の歴史を始め真実の記録が伝わらなかつた疑いがある。

祖国は国民のものである。口先ばかりで国民を軽視する政治が横行する現代であるが、せめて歴史の真実だけは国民が知る権利を有する。

「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造」は微力ながら我々同人が当初から目指している。三昧塚古墳で実証されたように、シルクロードの東の果てにある常陸国には長い道を進んで来た何かが埋もれて居る筈だと思っっている。国府跡 国分寺 古墳群など有り触れたものに満足せずに、大きな目で郷土の古代史を再発見して頂きたいと市民の皆さんをお願いしたい。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けていただき...、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

Coffee & Tea Room

### 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・

蕎麦会席料理のお店です

（ギター文化館通り）

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

（白井啓治方）